
君の正体（揺れる警視庁・・・その後）

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の正体（揺れる警視庁・・・その後）

【Nコード】

N6348B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

あの爆弾事件の後高木はコナンが何者かをコナン自身に問い詰める。

コナンずサイド

コナンは、蘭を恨んだ。

お使いなんか頼んでくれなきゃ、

こんな所で高木刑事に会わず済んだのに・・・。

パン屋の中に入ろうとした途端、

袋をさげて出てくる高木刑事と鉢合わせをしてしまった。

東都タワーの事件以来、高木が自分の事を、

いぶかしく思い、詰問してみたい

と思っているのは手にとるように分かった。

しかし、コナンの方に、何らかの事情があることも感じているらしく、

コナンと二人きりになれる機会を狙っているようだった。

コナンもそれがわかっていたので、

常に少年探偵団というようにし、

できるだけ高木刑事と出会わないようにしていた。

そうしておけば、忙しい刑事の仕事にまぎれて、

自分の正体に関する疑問など忘れてしまっただろう。

消極的な方法だが、

コナンにはそういう方法しか思いつかなかった。

今も、少年探偵団と一緒になら、

高木刑事も、自分を捕まえようとはしなかったらう。

しかし、一対一となると・・・。

コナンは、逃げようとしたが、

相手は、まがりなりにも確保のプロ。

あっけなく、コナンは、高木の手に落ちた。

抵抗を試みたが、高木の持っていたパンの袋を、

車道にはじき飛ばすだけに終わってしまった。

袋は、トラックのタイヤの下敷きになり、

二次元の存在となっていました。

アスファルトと一体化した、

その袋を見つめる高木の恨めしそうな目を見てコナンは言った。

「高木刑事・・・朝ご飯、食べてなかった？」

「コナン君。その推理はちよつと違っているよ。」

昨日から忙しくてね。昨日の晩から食べてないんだよ。

あれは大体24時間ぶりの食事になるはずだったんだ」

笑顔の高木だが、やや表情は引きつっている。

コナンはあえて無邪気に言った。

「それじゃあ、急いでご飯食べなくっちゃ。」

おなかすいてたら、皆の安全は守れないよ。

じゃ、ぼくは、高木刑事のご飯の邪魔しちゃいけないから」

と、さりげなく立ち去ろうとしたが、高木は、手を離してくれなかった。

「僕にはね、食事より、気になることがあるんだ。」

なんだか事情があるみたいだから、他の皆のいる所では聞かなかったけど、

今日こそは答えてもらうよ。

君は一体何者なんだ」

（うわゝ、直球勝負！こういう時は、「猫騙し」的にかわすか！？）

コナンはあえて深刻な表情を作って言う。

「ねえ、高木刑事。高木刑事だって、自分が何者かって知ってるの？」

情け容赦ないゲンコツがコナンの脳天を襲った。

「コナン君。ふざけないように」

（仕方ねえ。直球には、直球で勝負！！高木刑事には佐藤刑事だ！）

「あ！佐藤刑事だ！」

と、指差す方向と、逆方向にコナンはすばやく駆け去ろうとしたが、高木の手はしっかりとコナンの襟首を掴んでいた。

「コナンくん。僕が佐藤さんの名前を出したら、

いつでも動揺すると思ったら、大間違いだよ」

「あら、二人とも、何してるの？」

「佐、佐藤さん！？」

コナンが逃げようとした方向から

ホワイトダックの袋を上げた、佐藤がやってきた。

高木の手の力が一瞬抜けた。

しかし、まさしく、ひょうたんから駒の佐藤の出現に、

高木以上に驚いたコナンは、逃げるタイミングを失った。

「佐藤さんこそ。どうしてこんな所に」

「聞き込みが思ったより早く終わって。」

この近くの公園で、お昼を食べようと思ったのよ」

佐藤は、袋を、高木の前に差し出しながら言った。

「で、高木君は？」

高木は、コナンを猫の子のように、佐藤の前にぶら下げて言った。

「僕は、コナン君が何者か知りたいんですよ」

「降ろしてよ」。高木刑事」

高木は、慌ててコナンを降ろしたが、手は離さない。

「何者って、どういう意味？高木君」

「だって、佐藤さんだって言ってたでしょう？」

コナン君は、只者じゃあないって。だから・・・」

佐藤は、困ったように首を横に振った。

そして、コナンに目を合わせるため、しゃがみこむと笑顔で言った。

「じゃあ、まず基本的なことから聞きましょうか。」

あなたの、名前と、年を教えて」

「江戸川コナン。7歳。職業は、探偵さ！」

ことさら無邪気を装って、コナンは答えた。

「お母さんのお名前は？」

「江戸川文代」

「お父さんのお名前は？」

（うっ、父親の名前か。考えてねえぞ。写楽じゃあんまりか。

朝雄、にでもしょうか？

いや、待てよ。いつそ分らない事にしたらどうだろう。

今、俺の正体を知りたくて、冷静さを失っている高木刑事ならダメだろうが

佐藤刑事なら、父親の名前が、分らない、と答えたら、複雑な家庭の

事情を、子供から無理に聞きだすようなことはしないはず）急速に回転する思考を表に見せず、コナンは笑顔で答えた。

「知らない」

「知らないって、ふざけないでくれよ。コナン君！

そんなことあるわけ無いだろ！」

「だって、お母さん聞いても教えてくれないんだもん」

口を尖らせて、コナンは答えた。

なおも、何か言おうとする高木の肩を抑え、佐藤は言った。

「ありがとう、コナン君。じゃあ気をつけて帰ってね。

さ、高木君。手を離してあげて」

高木は渋々といった様子で、コナンから手を離した。

コナンは手を振り、二人を後に、走り去った。

さて、その日の夕方。

阿笠邸にきたコナンは、博士に昼間あったことを説明した。

「・・・と言うわけなんだ。

だから、もし高木刑事が、何か言ってきたら、

俺の父親は、博士も知らないってことにしてくれねえか？」

「それはかまわんが・・・。

それで高木刑事は、納得してくれるじやろうか」

電話が鳴り、哀が取った。

「その、高木刑事から、電話よ。『江戸川』君」

（いない、って言ってくれ）

コナンは、メモを書いて、哀に見せた。

「事務所にかけたら、ここにいて蘭さんに聞いたそうよ」

そう言っ、哀はコナンに受話器を押し付けた。

いつものように、親しみ深い声が受話器から聞こえる。

「ああ、コナン君。昼間はごめんね」

「僕こそ、高木刑事のご飯をダメにしてごめんなさい」

「いや、良いんだよ。そんなこと。」

それより、僕が言いたいのはね、コナン君。

君も色々あるみたいだけど、僕はもう問い詰めたりしないから。

ただ、もし、毛利さんの所や、阿笠博士の所に、

居づらいような事が、あればいつでも僕の所に来ていいからね。

僕や、佐藤さんは、いつでも君の力になりたいと思んだよ。

困った事や、辛い事があれば、どんな時でも相談に乗るから。

君は、一人じゃないんだから。ね。分かったかい？」

今一歩、高木刑事が、自分の事をどう考えているか、読めなかったが、

親身になって力になろうとしてくれる真心は痛いほど伝わってきた。

本当の事は話せないが、その心にコナンは素直に感謝した。

「ありがとう、高木刑事」

受話器を置いた、コナンに哀は言った。

「どうやら、問題は、片付いたみたいね」

「ああ」

コナンは、二人に、高木刑事の電話の内容を話したあと首をかしげながら言った。

「しかし、高木刑事は、

俺の家庭の事情をどういう風に推理したんだろう」

「まあ、間違つても、あなたの正体は、

ドジを踏んだ探偵で、殺されそなつて体が縮んだ、

なんて思つてないわよ。

そうね、阿笠博士の所に居づらい時、

と来たのなら、実は、あなたと私は、博士の子で母親違いの兄妹。

私の母が、あなたのお母さまを追いつ出した。

で、あなたのお母さまは、失意のうちに無くなり、

一度、博士に引き取られたけど、私の母も事故死したものだから、

博士は、愛していた女性の子供の方を手元に置きたくて、あなたを追いつ出した。

って、ところでどうかしら」

「おいおい、哀君。いくらなんでもそりゃ無いじゃろう」

「って言うか、灰原、おまえ、良くそんなこと、考え付くな」

「テレビ好きのおじいさんと、

ワイドショーのあとの、ソープオペラも見てるから。

じゃ、工藤君も作家の息子なら、面白い設定考えてね」

哀が地下の研究室に去ったあと、

コナンは博士を真面目に見て言った。

「な、さっきの話、本当に全部、灰原の創作か？」

「おい、新一。何をいつとるんじゃ」

「俺の事はともかく、あいつ、

夢物語を思いつくタイプじゃなさそうだし、

博士、なんか心当たりがあるんじゃ」

「絶対そんなことは・無い・・・いや計算が・・・たぶん・・・無い・・・無いはず」

「おい、博士」

疑惑の波紋は、わけも無く広がってしまったのであった。

高佐ずサイド

公園のその一角は、山茶花の植え込みに囲まれて静かだった。陽だまりの中に一つベンチが置いてある。

「いい場所でしょう。」

聞き込みの途中、一人で考えをまとめたい時とか良くここに来るのよ」

コナンと別れたあと、

高木は佐藤に引きずられるようにして、この場所に連れてこられていた。

「佐藤さんは、知りたくないんですか？コナン君の事」

せつかくのチャンスを、邪魔されて高木は、不満だった。

そんな高木に佐藤は、諭すように話し掛けた。

「どうして、高木君はコナン君のこと、そんなに気になるの？」

「だって、彼、分からない事だらけじゃないですか。」

あの年で、あの落ち着きと、知識」

「で、コナン君が何者かって知って、高木君はどうするの？」

そう問われて、高木は絶句した。

どうするといわれても、その後の事など、考えていなかった。

佐藤は、言葉を失った高木を優しく見つめた。

「でも、謎があれば、それを追求したくなる。」

一種の職業病ね。私も同じなの。

私も、コナン君の事、気になって、蘭さんにいろいろ聞いてみたの。それで、一つの推測にたどり着いたんだけど、聞いてくれる？

あのね、コナン君は……」

急に声をひそめた、佐藤の言葉を聞いた途端、高木は思わず叫んでいた。

「何ですって！そんなバカな！」

「しっ！高木君。声が大きい。」

誰が聞いているのかわからないのよ」

高木は、声を落した。

「でも、いくらなんでもそんな」

「もちろん、確たる証拠なんて無いのよ。

でもね、どんな人にだって、失敗はあるわ。

それに、阿笠博士の親戚の子なら、

どうして博士と一緒に住んでないのかしら？

一人暮らしで、手が回らないからって、

蘭さん、博士から頼まれたって言ってたけど

それならなぜ、あの女の子、哀ちゃん、だったけ、

と一緒に暮らしてるの？

男所帯で、って言う理由なら、両方が、

むしろ女の子の方を蘭さんに預けるのが普通じゃない？」

「でも、女の子なら、お手伝いできるし」

「そうは言ってもまだ、一年生よ。たいしたことはできないわよ。

それに、コナン君、一年らしかなぬ色んな事、

毛利さんから聞いた、って知ってるでしょう」

「つまり、毛利さんは、探偵事務所のあとを継がせる為、今から教育している、と」

「そうよ、それに、いつだって事件の時、毛利さんの側にいるですよ。」

普通だったら、殺人事件の現場から遠ざけるはずじゃない」

「これも、教育ですか？でも、ちよろちよろするなって、結構怒られて、

たんこぶこしらえてますよ。コナン君」

「そう、赤の他人の子供だったら、

あんな風に遠慮なくたたけないと思うのよ、私は。

コナン君は、お父さんの名前は知らないって言っていたけど、

あれだけカンのいい子ですもの、薄々分かってるんじゃないかしら。

自分のお父さんが、毛利小五郎だって事」

「しかし、うーん。コナン君の父親がねえ」

「やっぱり、自分の父親の仕事振りに、興味があるから、

毛利さんが意図する以上に、事件に首を突っ込んでくるんだと思うのよね

私も、子供の頃、お父さんの仕事を見たくてたまらなかったもの」

「確かに、妃弁護士と別居生活は、長いそうですが、

別の女の人の間に、子供なんて・・・。

白鳥さんの別荘での様子を見れば

単に意地の張り合いが長引いているだけ、

見たいな感じでしたし・・・」

「だから、コナン君の立場が微妙なんだと思うわ。

多分、お互いに本気じゃあなかったのよ。

でも、コナン君が生まれてしまった。

お母さんに育てられていたんだけど、お母さんは、新しい生活を見つけて、

毛利さんの所へ、コナン君を置いていってしまったんだと思うの。

これは、完全に推測なんだけど、

コナン君はあまりお母さんとうまくいってなかったんじゃないかしら？

蘭さんが言うには、ずいぶん長く離れているのに、

コナン君、お母さんを恋しがりもしないし、

お母さんのほうも、養育費を預けたつきり音沙汰ないって」

「じゃあ、どうして毛利さんは蘭さんや、

妃弁護士にちゃんと说不ないんでしょうか？」

「よりを戻したい、って相手に別の女との間にできた子と一緒にしろって言えるかしら？

それに、蘭さん。

ずっと、ご両親が、一緒にまた暮らす日を夢見てるのよ。

おまけに、思春期の微妙な年頃。

いきなり、腹違いの兄弟が現れたら、

複雑な心境どころじゃないわよ。

コナン君がどんな子であろうが拒否してしまうかも。

だから、毛利さんは阿笠博士に頼んで、

一芝居うつてもらったんだと思うの。

まずは、先入観無しに、コナン君本人と、

蘭さん、妃弁護士を仲良くさせてから、告白するつもりだと思うわ。蘭さんの話によると、妃弁護士の方はコナン君を気に入っているんだけど、

コナン君は、妃弁護士が苦手みたい。

やっぱり、血のつながりが無いからなのか、

遠慮してるのか。其処の所は私にも分からないわ。

とにかく、毛利さんは、コナン君と二人が

一緒に暮らしていけるほど仲良くなるのを待っているんだと思うの」

「コナン君がねえ」

高木は、考えこんだ。

佐藤の推測はもっともだ、と思った。

しかし、自分を完全に納得させるほどの証拠は無い。

高木は、爆弾事件の時の、落ち着き払ったコナンの顔を思い出した。そして、いつもの毛利探偵の顔も。

（彼らが、親子？）

ふと、記憶の中のコナンが、かすかに翳りのある笑みを浮かべる。

『ゴメンね、高木刑事・・・』

「高木君？どうしたの？」

急にうつむいて黙り込んでしまった、高木を不審に思っただけで佐藤は声をかけた。

高木は、顔をあげた。すっきりとした表情になっている。

「佐藤さん、佐藤さんの推測、完全に正しいと思います。」

あの時、爆弾事件のエレベーターの中でコナン君は僕に言ったんで

す。

『いるかもしれないんだ。そこに・・・』

この世で一番死なせたくない、大切な奴が・・・』

あの時は、誰の事なのか、わからなかったし、

コナン君も教えてくれなかったんですが・・・」

「『蘭さん』なのね」

「ええ、そうですね。実のお姉さんだって事、コナン君、知ってるんですよ」

「だから、たった、4文字で分かったのね。」

帝丹高校でなければいい、って、ずっと思っていたのよ。あの子、きっと」

佐藤の瞳に涙が浮かんた。

驚く高木に、微笑みかけながら、佐藤は、涙をぬぐった。

「いやね、私。涙もろくって。」

でも、あんな小さな体に、命を駆けてまで、愛する人を守りたい、って心が詰まっているかと思うとなんだか、感動しちゃって」

考えるより先に、体が動いていた。

佐藤の涙を自分の胸で止めるように、高木は佐藤を抱きしめていた。言葉を伝えたい。

言葉が見つからない。

高木の視線は、見つめればそこに言葉が浮かび上がるかのように一点を見つめた。

刹那、驚きで、身を硬くした佐藤が、ゆっくりと高木の腕の中で力を抜いていく。

「さ、佐藤さん」

（僕だって、僕にだって・・・）

その時、何も与えられず酷使されていた体が、

エネルギーを要求する抗議の声をあげた。

慌てて、高木は、佐藤の体を離れた。

佐藤は、一瞬の間を置いて、吹き出した。

「高木君、一緒にお弁当食べましょうよ。」

昨日から忙しくて、ほとんど食べてなかったんでしょ」

「あ、でも佐藤さんの分」

「大丈夫、夜食にしようと思って、たくさん買っているのよ」

二人は、何事も無かったかのように、食事を始めた。

しばらくして、佐藤が言った。

「コナン君のこと。内緒にしておきましょうね。」

時がくれば、きっと真実は明らかになるわ。」

その、タイミングが、大切だと思うのよ」

高木は、おにぎりを口いっぱいにしたまま頷いた。

その日の夕方。

コナンへの携帯を切った高木は、思った。

『やっぱり、蘭さんの所に、居づらい時もあるんだな、コナン君。でも、僕らは、君の味方だから。』

早く、家族一緒に、仲良く堂々と暮らせる時が来ればいいね。

それにしても、佐藤さんはやっぱり大人だなあ。

ただ、真実だけを知りたくて、危く、一つの家族に、治せないほどの亀裂をいれてしまう所だった、僕を、止めてくれた。

2歳の年の差は大きいや。

いや、僕だって、がんばるぞ！』

ふつつつと湧く、意欲を胸に、高木は再び、仕事へと戻るのであった。

（おわり）

高佐ずサイド（後書き）

これも某サイト様へ投稿させていただいていたものです。
常識的にコナン君の正体を考えれば
これが一番ありそうだと思いますが（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6348b/>

君の正体（揺れる警視庁・・・その後）

2010年10月14日17時09分発行